

分離後の被虐待乳幼児の2つの処遇

—里親養育と施設養育とによる心理・社会的発達についての比較研究

第1報—

青木豊¹⁾、庄司順一²⁾、鈴木浩之³⁾、加藤芳明⁴⁾、平部正樹⁵⁾、安部伸吾⁶⁾、松尾真規子¹⁾

相州乳幼児親心療センター（あつぎ心療クリニック附属）1)

青山学院大学2)

神奈川県中央児童相談所3)

神奈川県庁4)

目白大学5)

唐池学園6)

<要 旨>

近年わが国において児童虐待とりわけ乳幼児虐待へのアプローチは精神保健の重要な課題となっている。虐待の重篤なケースは児童相談所により原家族からの分離が行われることも多く、代理養育として施設養育か里親養育が選択される。本研究の大目的は、里親養育を受けている被虐待乳幼児の発達を調査し、すでに結果を得ている施設養育でのそれと比較することにある。今回の第1報では、里親の乳幼児への情緒的絆ボンディング、養育を受けている被虐待乳幼児の里親へのアタッチメント、問題行動などを1回の調査で分析し報告する。対象は首都圏を含む6つの児童相談所管轄地域において里親養育を受けている71人の被虐待乳幼児（月齢10-50か月）とその里親である。児童相談所から背景の情報を得、里母・里父にそれぞれ、ボンディングスケール、育児ストレスPSI、乳幼児について愛着行動チェックリストABCL、子どもの問題行動チェックリストCBCL、被虐待児への問題行動チェックリストCMTIを行った。結果、ボンディングの得点と乳幼児のアタッチメントの適応性に有意な正の相関がみられ、アタッチメントの適応性と問題行動には有意な負の相関があった。また育児ストレスと問題行動にも一定の正の相関が見出された。これら結果は、里親養育における里親と被虐待児のアタッチメント関係の重要性と、里親と乳幼児に対してアタッチメントに方向づけられた支援を行うことの正当性を示唆している。

<キーワード>

被虐待乳幼児 アタッチメント 里親養育 問題行動

【はじめに】

近年わが国において児童虐待とりわけ乳幼児虐待へのアプローチは精神保健の重要な課題となっている。虐待の重篤なケースが児童相談所により原家族からの分離が行われるため、これらケースに対する支援の重要性もとりわけ高いと考えられる。分離後の支援体制の内、「乳幼児の生活の場をどこにするか？誰が主要な養育を行うのか？」という課題は、被虐待乳幼児にとって決定的に重要である。というのも乳幼児の心理・社会的発達が環境（特に主要な養育者との関係）によって大きく左右されるとの実証的研究が積み重ねられているからで

ある（Zeanah et al., 2000; DC:0-3R, 2005; 井上ら, 2003）。特に虐待によりアタッチメントを障害された乳幼児に適応的な感受性を持った養育者を与えアタッチメントを適応化することは最重要視されている（Cicchetti, & Toth, 1995; Lieberman, & Zeanah, 1999; AACAP, 2005; 青木, 2008a）。

さて米国・英国において、1960年代施設での養育が発達に問題を与えることと、里親養育の方が施設養育よりも心理・社会的発達の予後が良いとの研究が発表された（Provence & Lipton, 1962; Skeels, 1966）。以来英国、米国

においては同エビデンスなどに基づいて、虐待・ネグレクトにより分離が行われた場合、養護施設をできるだけ用いず、里親養育が行われている。里親養育の優位性を生むメカニズムについては、施設環境ではアタッチメントの適応化が困難で、家庭に近い里親養育がより適切であるとの考えが支配的である。というも、以下のような実証的研究の蓄積があるからである、すなわち第1に、一般に被虐待乳幼児へのアタッチメントに方向づけられた介入効果の実証的研究がその有効性をしめしており(総論として、Lieberman, & Zeanah, 1999; 青木と松本, 2006)、第2に、里親と乳幼児のアタッチメント関係が児の発達に影響を与えているとの基盤的研究がある、より具体的には例えば、里親のアタッチメントのタイプが里子とのアタッチメントの型と関連するとの研究(Dozier et al., 2001) 里親の乳幼児への心的関わりの強さが、CBCLによる問題行動が少なかったという研究(Lindhiem & Doziew, 2007)などである、第3に次のステップとしてすでに欧米では里親を対象にアタッチメントに方向づけられた介入・支援を行い、被虐待乳幼児の発達を支援する試みや、その実証的研究が始まっているからである。すなわち劣悪な施設環境からアタッチメントに方向づけられた里親養育への移行を行うことにより、アタッチメントの適応化と問題行動の減少が見られるとの実証研究(Smyke et al., 2009) や、アタッチメントに方向づけられた里親への支援を行うことにより、乳幼児のアタッチメントが適応化する(Fisher, & Kim, 2007) などの研究である。

一方現在わが国では分離後、乳児院への入所、里親による養育などの処遇が行われているが、その処遇は里親家族が少なく、施設養育の方が圧倒的に多く用いられている(庄司, 2008, 御園生, 2008)。しかしこれら処遇の選択は必ずしも系統だっで行われておらず、個々のケースごとにその時点における地域の利用可能な施設の状況などにより決められているのが現状であろう。施設における被虐待児の発達や支援についての研究については、発達の実証的研究(青木, 2008b)、施設におけるアタッチメントに方向づけられた支援の症例報告や準備的実証的研究(鈴木, 2002; 西澤, 2008; 森田, 2007; 青木, 2008b) が散見される状況であり。里親養育については、アタッチメントの重要性を示唆する総論(庄司, 2008, 御園生, 2008) などが見出されるのみである。したがって里親養育と施設養育との差についての実証的検討や、里親養育下の被虐待乳幼児のアタッチメントにつ

いての実証的研究などは我が国ではほぼ皆無であると言って良い(庄司, 2008, 御園生, 2008)。つまり分離された被虐待乳幼児に対する分離後の支援体制についての研究は、我が国においていまだ不十分な段階にあると(社会保障審議会, 2007)。このようなわが国の現況から、分離後の環境(施設、里親による養育)が被虐待児にどのような影響を与えているか、両処遇による乳幼児の心理・社会的発達の差異について、特にアタッチメントの計測を含んで、調査・研究することはきわめて重要であると考えられる。というも、上記の欧米における研究が即我が国に適用できるかどうかについて、我が国における実証的研究を待たなければならないからである。すなわち欧米における研究は、第1にルーミアにおける劣悪な乳児院や、1960年代の英国の施設についての研究であって、本邦における現在の施設とは異なっており、我が国の施設環境がルーミアの施設や60年代の英国の施設より大幅に適切である可能性が十分に考えられるからである。第2に里親養育も欧米におけるものと本邦におけるそれが、文化的差異もあり同等とは断じられないからである。本研究の当初の大目標は、我が国において、被虐待乳幼児に対する2つの処遇環境—施設養育と里親養育と—が子どもたちにどのような影響を与えるか調査するものであった。我が国において、里親制度を充実すべきか、乳児院における養育に改善の必要があるかなどの課題を、これら研究の結果というにエビデンスに基づいて検討することが可能となる。

同目的を果たすために、われわれグループではすでに、被虐待乳幼児(10~50カ月)の施設養育10か月間での施設職員へのアタッチメントの変化、問題行動の変化などについて、すでに準備的な報告を行っている(青木, 2008b)。その結果の一部をここに記すと、被虐待児(10~50カ月)の施設職員へのアタッチメントは、部分的には適応化に向かったが、一方問題行動はほとんど改善しなかったとの所見である。今回の調査の目的は、ほぼ同じ性格を持った被虐待乳幼児について、里親養育10か月間で、主に里親へのアタッチメントの変化と問題行動の変化などを調査ことが目的であった。これら所見が得られれば、上記研究結果と照合することにより、2つの処遇の被虐待児に与える影響を比較することができる。

しかし本報告では上記の大目標に向けて、里親養育についての1部の研究を報告することにした。それは以下の状況による、すなわち今回の里親養育についての研究で、対象数がある程

度に達するよう調査を実行したため、地域を当初計画していた2地域から6地域に拡大せざるをえなかった。その経過で、初回調査が終了するのに6か月間近くを要してしまったのである。そのため第2回調査が終了するのは、2009年の10月の予定である。見込みが不十分であったとはいえ、やはり里親養育を受けている被虐待児が少ないという事実を反映した研究経過となった。そのため以下に、里親養育を受けている71例の被虐待乳幼児について、第1回調査の結果とその考察を述べる。

われわれの仮説は、1) 里親のボンディング(子への情緒的つながり)が高いほど、里子の同里親へのアタッチメントは適応的で、2) アタッチメントが適応的な方が、問題行動は少ないであろうし、3) ボンディングが高いほど、育児ストレスは少ないであろう、4) ボンディングが高いほど、問題行動は少ないであろう、また5) 育児ストレスが高い方が、問題行動が多くなるであろう、などの仮説である。

[1] 対象と方法

対象：首都圏を含む7つの地域において、虐待・ネグレクトのために養育者との分離が行われ里親養育を受けている、月齢10ヶ月から50ヶ月の乳幼児で、里親への研究協力が得られたケースである。各々の地域の児童相談所長に研究の同意を書面で得、各児童相談所が適応なケースをリクルートした。里母、里父が研究同意(書面による)をしてくれたケースである。

方法：1) 児童相談所の記録から以下の背景を調べた：①発達指数、②身長・体重、③虐待・ネグレクトの種類、④虐待者が誰か、⑤虐待者の精神疾患の有無、⑥原家族との面会の有無、など。2) 以下の里親(里母、里父)により以下の質問紙を記載してもらった：①子どもの行動チェックリスト：CBCL(親用)－子どもの問題行動を測るもので、内向尺度、外向尺度、総得点で表わされる、②被虐待児の問題行動チェックリストCMTI(奥山班, 2007)－被虐待児の問題行動を測るもので、トラウマ尺度、愛着尺度、感覚統合尺度、で表わされる。③愛着行動チェックリストABCL(青木, 2005)－対象児の里親に対するアタッチメントの適応度を計測するもので、「心の理解」「非安全の行動」「安全基地」の3因子で得点化される、④里親のボンディング：ボンディングスケール、⑤里親の育児ストレス：育児ストレス尺度PSIで「子どもの側面」と「親の側面」の2因子で点数化される。

この調査を第1回調査として、その10カ月後に同様の調査を行う予定であるが、既に記したように今回は第1回の調査のみを報告する。

[2] 結果：

以下報告所として特に重要なデータについて記載する。

また今回の分析でCMTIはすべて逆転に点数化されており、点数が低い方が非適応的となっている。

1. 基本情報

1) 対象の性質：①男子38人、女子33人、合計71人の被虐待乳幼児、②月齢は、10から50か月で、平均33.5か月、③委託期間は1か月から34か月で平均12.3か月である。④身体的虐待は15.8%、心理的虐待は9.2%、ネグレクトは56.6%、性的虐待は2.6%、遺棄は23.7%であった。母親、父親のCBCLの内向尺度、外向尺度、総得点の平均はそれぞれ、7.42(50パーセントイル)、16.87(50パーセントイル)、32.08(50パーセントイル)；7.42(50パーセントイル)、16.63(50パーセントイル)、31.71(50パーセントイル)、である。母親、父親のCMTIのトラウマ尺度、愛着尺度、感覚・行動・調節尺度の平均はそれぞれ、22.13(介入域)、110.91(介入域)、108.16(境界域)；22.82(介入域)、110.22(介入域)、107.69(境界域)であった。アタッチメントを測定したABCLについては、母親、父親にたいして、「こころの理解」「非安全の愛着行動」「安全基地」の平均がそれぞれ、36.82、34.36；21.74、21.02；27.79、25.71であり、父母で有意な差はなかった。里母、里父の育児ストレスPSIの「子どもの側面」「親の側面」の平均はそれぞれ、80.65(35-40パーセントイル)、90.96(20-25パーセントイル)、80.71(35-40パーセントイル)、89.11(15-20パーセントイル)であった。

2) アタッチメントについて：

委託期間とABCLの尺度間の相関係数は、里母、里父の「こころの理解」「非安全の愛着行動」「安全基地」がそれぞれ、.2178、-.118、.035；.287*、-.189、.142で、父親にたいする「心の理解」のみ有意な関連が見られた。

里母、里父に対するアタッチメントと問題行動(CBCL, CMTI)との関連については以下の表に示す。小文字mは里母、fは里父を表す。

相関係数

		CBCL_内的_m	CBCL_外的_m	CBCL_総得点_m	CBCL_内的_f	CBCL_外的_f	CBCL_総得点_f
ABCL_こころの理解_m	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.430** .000 70	-.418** .000 70	-.439** .000 70			
ABCL_非安全の愛着行動_m	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	.465** .000 68	.527** .000 68	.532** .000 68			
ABCL_安全基地_m	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.085 .482 70	-.122 .316 70	-.112 .355 70			
ABCL_こころの理解_f	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N				-.385** .001 66	-.576** .000 66	-.491** .000 66
ABCL_非安全の愛着行動_f	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N				.320** .009 65	.452** .000 65	.417** .001 65
ABCL_安全基地_f	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N				-.284* .020 67	-.358** .003 67	-.322** .008 67

CMTI

6ヶ月以上2歳未満

相関係数

		CMTIトラウマ_m	CMTI愛着_m	CMTI感覚・行動・調節_m	CMTI総合_m	CMTIトラウマ_f	CMTI愛着_f	CMTI感覚・行動・調節_f	CMTI総合_f
ABCL_こころの理解_m	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	-.179 .559 13	.102 .740 13	.087 .757 15	-.027 .931 13				
ABCL_非安全の愛着行動_m	Pearsonの相関係数 有意確率(両側)	-.354 .236	-.379 .201	-.449 .094	-.472 .103				

	N	13	13	15	13				
ABCL_安全基地_m	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)	-.143 .642	-.436 .136	.148 .599	-.248 .414				
	N	13	13	15	13				
ABCL_こころの理解_f	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)					.321 .262	-.098 .739	.393 .164	.259 .372
	N					14	14	14	14
ABCL_非安全の愛着行動_f	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)					-.230 .409	.015 .957	-.275 .322	-.215 .441
	N					15	15	15	15
ABCL_安全基地_f	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)					.319 .246	-.534* .040	.283 .306	.012 .965
	N					15	15	15	15

CMTI
2歳以上

相関係数

		CMTI ト ラウマ _m	CMTI 愛 着_m	CMTI 感 覚・行 動・調節 _m	CMTI 総 合_m	CMTI ト ラウマ _f	CMTI 愛 着_f	CMTI 感 覚・行 動・調節 _f	CMTI 総 合_f
ABCL_こころの理解_m	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)	.362** .008	.464** .001	.457** .001	.493** .000				
	N	52	52	51	51				
ABCL_非安全の愛着行動_m	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)	-.399** .004	-.468** .001	-.496** .000	-.522** .000				
	N	50	50	50	50				
ABCL_安全基地_m	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)	.076 .591	.225 .108	.238 .092	.240 .090				
	N	52	52	51	51				
ABCL_こころの理解_f	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)					.492** .000	.344* .018	.413** .004	.479** .001
	N					48	47	48	47
ABCL_非安全の愛着行動_f	Pearsonの相関係数 有意確率 (両側)					-.238 .111	-.345* .020	-.406** .005	-.445** .002
	N					46	45	46	45
ABCL_安全基地_f	Pearsonの相関係数					.407**	.259	.234	.306*

有意確率 (両側)					.004	.079	.110	.036
N					48	47	48	47

里母、里父に対するアタッチメントと育児ストレスを計測したPSIと親の子どもへの情緒的
きずなを測定したボンディングスケールとの関連については以下の表に示す。

相関係数

		PSI_子ども の側面 _m	PSI_親 の側面 _m	PSI_総 点_m	BO_総 点_m	PSI_子ども の側面 _f	PSI_親の 側面_f	PSI_総 点_f	BO_総 点_f
ABCL_こ ろの理解 _m	Pearson の 相関係数 有意確率 (両側) N	-.537** .000 72	-.317* .010 65	-.478** .000 66	.321** .006 72				
ABCL_非安 全の愛着 行動_m	Pearson の 相関係数 有意確率 (両側) N	.630** .000 70	.408** .001 63	.622** .000 64	-.242* .044 70				
ABCL_安全 基地_m	Pearson の 相関係数 有意確率 (両側) N	-.180 .129 72	-.076 .548 65	-.068 .590 66	.311** .008 72				
ABCL_こ ろの理解 _f	Pearson の 相関係数 有意確率 (両側) N					-.633** .000 66	-.488** .000 60	-.610** .000 60	.499** .000 68
ABCL_非安 全の愛着 行動_f	Pearson の 相関係数 有意確率 (両側) N					.589** .000 65	.491** .000 60	.587** .000 60	-.239 .052 67
ABCL_安全 基地_f	Pearson の 相関係数 有意確率 (両側) N					-.411** .001 67	-.314* .014 61	-.403** .001 61	.433** .000 69

3) 養育のストレスおよびボンディングと問題行動との関係
およびボンディングスケールと問題行動 (CBCL, CMTI) の相関を以下に表示する。

次にPSIと問題行動 (CBCL, CMTI) の相関、お

相関係数

		CBCL_内的 _m	CBCL_外的 _m	CBCL_総得 点_m	CBCL_内的 _f	CBCL_外的 _f	CBCL_総得 点_f
PSI_子ども の側面_m	Pearson の相関 係数 有意確率 (両 側) N	.696** .000 70	.671** .000 70	.722** .000 70			

PSI_親の側面_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.383** .002 63	.213 .094 63	.313* .012 63			
PSI_総点_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.590** .000 64	.491** .000 64	.578** .000 64			
PSI_子どもの側面_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N				.605** .000 66	.643** .000 66	.659** .000 66
PSI_親の側面_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N				.464** .000 60	.389** .002 60	.464** .000 60
PSI_総点_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N				.590** .000 60	.579** .000 60	.626** .000 60

相関係数

		CMTI ト ラウマ _m	CMTI 愛 着_m	CMTI 感 覚・行動・ 調節_m	CMTI 総 合_m	CMTI ト ラウマ_f	CMTI 愛着_f	CMTI 感 覚・行動・ 調節_f	CMTI 総 合_f
PSI_子どもの側面_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-.531 .062 13	-.648* .017 13	-.616* .014 15	-.734** .004 13				
PSI_親の側面_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-.491 .089 13	-.369 .215 13	-.338 .237 14	-.500 .082 13				
PSI_総点_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-.556* .048 13	-.544 .055 13	-.506 .065 14	-.664* .013 13				
PSI_子どもの側面_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N					-.676** .008 14	-.140 .633 14	-.637* .014 14	-.659* .010 14

PSI_親 の側面 _f	Pearson の相関係 数 有意確率 (両側) N					-.552*	.294	-.531	-.337
						.041	.308	.051	.239
						14	14	14	14
PSI_総 点_f	Pearson の相関係 数 有意確率 (両側) N					-.650*	.091	-.619*	-.523
						.012	.757	.018	.055
						14	14	14	14

また、育児ストレス PSI とボンディングとの相関の結果を以下に表示する。

相関係数

		BO_総点_m	BO_総点_f
PSI_子どもの側面_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-.501** .000 72	
PSI_親の側面_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-.466** .000 65	
PSI_総点_m	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-.522** .000 66	
PSI_子どもの側面_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N		-.486** .000 68
PSI_親の側面_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N		-.588** .000 62
PSI_総点_f	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N		-.590** .000 62

[3] 考察

被虐待乳幼児は、アタッチメント形成の問題をはじめ多くの問題行動を示すことが知られている（総論として、Lyons-Ruth & Jacobvitz, 2008, 数井, 2007; 北川, 2007）。こういった乳幼児の I 部が元家族から分離されあるいは遺棄されて、代理養育者である里親や施設職員に育てられることになる。

はじめにで既に述べたように、これら養育者との関係は、被虐待乳幼児の心理・社会的発達に大きな影響を与える。とりわけ、虐待によりアタッチメント形成に問題をもった乳幼児が、新たな養育者とより適応的なアタッチメントを形成することは最重要の課題であり、このアタッチメントの適応化が問題行動の軽減・改善を促す重要な要因となると考えられる。

さて乳幼児と養育者のアタッチメント関係についての概念化は、van IJzendoon et al. (1991,1995) 青木 (2008c) から行っているが、概ね養育者の側の要素に、心的な要素として内的作業仮説とボンディング (Brockington,2003)とが、養育行動として感受性が挙げられている。一方、乳幼児側の要素としてアタッチメントそのものが挙げられている。被虐待乳幼児と虐待者とのアタッチメント関係は重篤に非適応的であり、乳幼児のアタッチメントは大きく障害される。こうした乳幼児が新しい養育者、本研究の対象としては里親との新しいアタッチメント関係を形成する。すなわち里親の適応的なボンディングと感受性により、乳幼児のアタッチメントも適応化し、このことにより問題行動が軽減することが望まれる。またボンディングは育児ストレスとも関連していると考えられる(Brockington,2003)。

したがって今回の研究の仮説は既に記したように、1) 里親のボンディング (子への情緒的つながり) が高いほど、里子の同里親へのアタッチメントは適応的で、2) アタッチメントが適応的な方が、問題行動は少ないであろうし、3) ボンディングが高いほど、育児ストレスは少ないであろう、4) ボンディングが高いほど、問題行動は少ないであろう、また5) 育児ストレスが高い方が、問題行動が多くなるであろう、などの仮説である。

1. 基本情報から

里母・里父ともに今回のデータでは、育児ストレスはそれほど高くなかった。里親の「子どもの側面」「親の側面」はすべて

40 パーセント以下であった。

興味深いことに、里母・父が記載したCBCLによる問題行動では大きな問題が見られなかった。里親の評価では内向尺度・外向尺度ともにすべて 50 パーセント以下であった。ところが CMTI (被虐待児の問題行動のチェックリスト) では、問題行動の高さを示唆する結果を得た。すなわち里母の評価でトラウマ尺度、愛着尺度は介入域、感覚・行動・調節尺度は境界域であり、里父の評価でも同様であった。CMTI が被虐待児の問題行動については、感受性が良いのかもしれない。

これら総合すると、里親は児の問題行動を評価しているものの、そのために著しい育児ストレスには陥っていない可能性がある。

2. 里親のボンディングと乳幼児のアタッチメントの関係

本研究の結果は、概ね仮説を支持するものであった。すなわち里母、里父ともにボンディング得点が高いほど、アタッチメントはより適応的であった。すなわち、里母里父ともにボンディング得点と ABCL の「心の理解」および「安全基地」に有意の正の相関がみられた。里母では、ボンディング得点と「非安全の行動」には有意の負の相関がみられたが、里父では有意な相関には至らなかった。これらの結果は欧米での既に記した所見と同方向の結果である (Dozier et al., 2001 等)。

3. アタッチメントと問題行動の関係

このテーマについても、概ね本研究の結果は概ね仮説を支持するものであった。すなわち、里母、里父へのアタッチメントが適応的な方が、問題行動が少なかった。よ

り具体的には、CBCL については、里母、里父に対してともに「心の理解」が CBCL の内向・外向得点と有意な負の相関を示し、「非安全の行動」は、内向・外向得点と有意な正の相関を示した。里母に対する「安全基地」は CBCL の内向・外向得点と有意な相関を示さなかったが、里父に対する「安全基地」は CBCL の内向・外向得点と有意な負の相関が見出された。CMTI については、6 か月以上 2 歳未満では、ABCL との有意な相関をほとんど見出せなかったが（ちなみに CMTI は、6 か月以上 2 歳未満と 2 歳以上では、質問項目が異なっている）、2 歳以上では里母に対する「心の理解」と CMTI のトラウマ尺度、愛着尺度、感覚・行動・調節尺度すべてが有意な負の相関を示し、「非安全の行動」はトラウマ尺度、愛着尺度、感覚・行動・調節尺度すべてと有意な正の相関を示した。しかし「安全基地」については有意な相関は得られなかった。里父については、「心の理解」はトラウマ尺度、愛着尺度、感覚・行動・調節尺度すべてと有意な負の相関を、「非安全の行動」は愛着尺度、感覚・行動・調節尺度と有意な正の相関を、「安全基地」はトラウマ尺度と有意な負の相関をしめした。これらの結果もまた欧米での既に記した所見と一致する（Lindhiem & Doziew, 2007 等）。

4. ボンディングと問題行動 CBCL, CMTI

われわれの仮説は、ボンディング得点が高い方が、問題行動が少ないであろうとの仮説である。結果は CBCL については、ほぼ同仮説を支持していたが、CMTI との関連では、一部しか支持しないものとなっていた。より具体的には、里母、里父ともにボンディング得点は CBCL の内向・外向得点と

有意な負の相関を示していた。一方、CMTI で優位な相関を示したのは、2 歳以上で里母の愛着尺度のみであった。これら所見は“*This is My Baby*”インタビューにより計測された里親の乳幼児への心的関わりの強さが、CBCL による問題行動が少なかったという Lindhiem & Doziew(2007)の研究結果と同じ方向への結果である。

2, 3, 4 をまとめると、ボンディングは虐待乳幼児のアタッチメントの適応性と関連しており、アタッチメントの適応性は問題行動の少なさと関連しているが、ボンディングは問題行動とは CBCL 以外では弱いものとなっていた。これら結果は、ボンディング→アタッチメント→問題行動という関連のメカニズムは強いが、ボンディング→問題行動という関連性はそれに比して間接的なものであることを示唆している。今後統計分析をより深化させてこれらの関係を分析する予定である。しかし後にも示すように、今回の研究では、同時的関連のみをとらえているため、因果関係を推測することに大きな限界がある。

5. 育児ストレスと問題行動との関連

この点も大まかには結果は我々の仮説を支持していた。すなわち育児ストレスが高い方が、問題行動が多いとの結果である。より具体的には、里母・里父ともに、PSI の「子どもの側面」も「親の側面」もともに、CBCL の内向・外向尺度とが有意な正の相関を示していた。CMTI との関連では、里母では、PSI の「子どもの側面」と愛着および感覚・行動・調節尺度と有意な正の相関を示したが、「親の側面」は有意

な相関は見られなかった、里父については、「子どもの側面」がトラウマ尺度、感覚・行動・調節尺度と有意な正の相関を示し、「親の側面」はトラウマ尺度のみと正の相関を示していた。

6. ボンディングと育児ストレス

ボンディングが高い方が育児ストレスは少ないとの方向の結果であった。すなわち里母・里父のボンディングの得点と、PSIの「子どもの側面」「親の側面」はすべて有意な負の相関であった。これらの因果関係は明確ではない。

7. その他の分析

その他、結果には載せていないが、里親での養育期間とABCLの3因子、問題行動(CBCL)には有意の相関はなかった。

考察をまとめると里親の乳幼児へのボンディングが高いほど、乳幼児の里親へのアタッチメントが適応的で、アタッチメントが適応的なほど、問題行動は少なかった。またボンディングが高いほど問題行動は少いとの傾向もみられた。はじめに記したように、この結果は第1に養育者側のボンディングが乳幼児のアタッチメント形成に影響を与えるとの一般論と((Brockington,2003; van IJzendoon et al.,1991,1995; 青木,2008c)、第2には里親の表象が里子のアタッチメントに影響を与えるとの実証的研究(Dozier et al.,2001)と一致した所見である。また乳幼児のアタッチメントの適応性が問題行動の保護因子となるとの一般的な実証研究(総論として、Thompson,2008)と、里親へのアタッチメントに方向づけられた介入の有効性についての研究(Smyke et al.,2009;Fisher, & Kim,2007)とも符合する結果である。また

ボンディングが強いほど、育児ストレスは低く、育児ストレスが低いほど、問題行動は少なかった。

これらの結果は、本邦の里親養育においても、被虐待乳幼児が問題行動を軽減し、より適応的な発達へと導くためには、里親とのアタッチメント関係が重要性であることを示唆している。また欧米ではすでに実証的効果研究が行われており、本邦でもすでにその重要性が指摘されているように(庄司,2003,2008;御園生,2008)、アタッチメントに方向づけられた里親養育支援プログラムの必要性を示している。

さて本研究には、一方いくつかの大きな限界がある。第1に、1回の調査での分析であるために、ボンディング、アタッチメントの適応性、問題行動、育児ストレスなどの因果関係が不明な点である。現時点で始まっている第2回調査の結果を得ることにより、それら因果関係をより明らかにすることが期待される。第2の限界は、質問紙法による限界である。本研究では、里親へのインタビューや、乳幼児とのアタッチメント関係の直接的行動観察などが行われていないために、そのデータの信頼性・妥当性が堅固なものとは言えない側面がある。将来、インタビューや行動観察を含んだ研究が期待される。

当研究の今後について最後に記述する。当研究は、現時点で第1回調査後10か月を経た第2回調査が始まっている。第2回調査を終えて初めて、第1回調査から10か月間で、乳幼児のアタッチメントの適応性、問題行動等がどのように変化するかを検討することができる。また上記のようにそれぞれの因子の因果関係をより明瞭にするこ

とができよう。またすでに述べたように、乳児院および児童養護施設における被虐待乳幼児の発達について、本研究とほぼ同じ方法でわれわれすでに準備的研究を終了している(青木、2008b)。本研究の里親養育における発達と施設養育のそれを比較検討する予定である。

【文献】

- AACAP official action (2005). Practice parameters for the assessment and treatment of children and adolescents with reactive attachment disorder of infancy and early childhood, *J. Am. Acad. Child Adolesc. Psychiatry*, 44, 1206-1219.
- 青木豊 (2008a) 被虐待乳幼児に対するトラウマ治療と愛着治療、*日本トラウマティック・ストレス学会誌*, 6, 15-23.
- 青木豊ら(2008b) 平成 17-19 年度総合研究報告、厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究 pp475-484.
- 青木豊 (2008c) アタッチメントの問題とアタッチメント障害、*子どもの虐待とネグレクト*, 10 (3) 285-296.
- 青木豊, 松本英夫 (2006) 愛着研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチについて、*児童青年精神医学とその近接領域*, 47(1), 1-15.
- Brockington, I. (吉田敬子訳) : 母子間のボンディング系聖の障害と診断学的意義. *精神科診断学*, 14 ; 7-17, 2003
- Cicchetti, D., & Toth, S. (1995). *Child Maltreatment and attachment organization*. Goldberg & Kerr (Eds.) *Attachment Theory: Social, developmental, and Clinical perspectives*. pp.279-308. Hillsdale, NJ. Analytic Press.
- Diagnostic Classification of Mental Health and Developmental Disorders of Infancy and Early Childhood REVISED EDITION:DC:0-3R.(2005) Zero to Three Press Washington,DC.
- 井上美鈴、青木豊、松本英夫ら (2003) 乳幼児-養育者の関係性の総合的評価法について *児童青年精神医学とその近接領域*, 44, 293-304.
- 数井みゆき (2007) 子どもの虐待とアタッチメント、数井みゆき、遠藤利彦編、*アタッチメントと臨床領域*, pp79-101、ミネルヴァ書房
- 北川恵 (2007) 精神病理とアタッチメントの関連、数井みゆき、遠藤利彦編、*アタッチメントと臨床領域*, pp102-130、ミネルヴァ書房
- Lieberman, A. & Zeanah, C. (1999). Contributions of attachment theory to infant-parent psychotherapy and other interventions with infants and young children. Cassidy, J., & Shaver, P.R. (Eds.) *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. pp.55-574, New York: Guilford Press
- Lindhiem, O., & Dozier, M.(2007). Caregiver commitment to foster children : the role of child behavior. *Child Abuse Negl*,31:361-374.
- Lyons-Ruth, M., & Jacobvitz, D.(2008). *Attachment disorganization: Genetic,*

- Parenting Contexts, and Developmental Transformation from Infancy to Adulthood, J. Cassidy & P. Shaver eds. Handbook of Attachment. Pp.666-698. Guilford Press. New York, London
- 御園生直美 (2008) 里親養育とアタッチメント, 子どもの虐待とネグレクト, 10. 307-314.
- 森田展彰. (2007) 児童福祉ケアの子どもが持つアタッチメントの問題に対する援助. 数井みゆき・円筒利彦編: アタッチメントと臨床領域. ミネルヴァ書房, p.186-203.
- 西澤哲 (2008) 施設におけるアタッチメントの形成, 子どもの虐待とネグレクト, 10. 297-306.
- Provence, S., & Lipton, R. (1962). *Infants Reared in Institutions*. New York: International University Press.
- Skeels, H. (1966). Adult status of children with contrasting early life experiences. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 31 (Serial no. 105)
- 鈴木ネ右子 (2002) 乳児院入所児童の愛着関係再形成のプロセスについて, H13 年度児童環境づくり等総合調査研究事業 (子ども家庭総合研究事業)
- 社会保障審議会 (2007) 『社会的陽度専門』
- 庄司順一 (2008) わが国における社会的養護とアタッチメント理論, (庄司、奥山、久保田編) アタッチメント, pp92-121, 明石書店
- 庄司順一 (2003) 『フォスターケア—里親制度と里親養育』 (明石ライブラリー55) 明石書店
- Thompson, R. (2008). Early attachment and later development: Familiar questions, New answers. J. Cassidy & P. Shaver eds. Handbook of Attachment. pp.348-365. Guilford Press. New York, London
- van IJzendoon, M., Kranenburg, M., Zwart-Woudstra, H., et al. (1991): Parental attachment and children's socio-emotional development: Some findings on the validity of the adult attachment interview in the Netherlands. *International Journal of Behavioral Development*, 14, 375-394.
- van IJzendoon, M., Juffer, F., & Duyvesteyn, M. (1995). Breaking the intergenerational cycle of insecure attachment: A review of the effects of attachment-based interventions on maternal sensitivity and infant security. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 36, 225-248.
- Zeanah, C. H., Larrieu, J.A., Heller, S.S, et al. (2000) : Infant-Parent Relationship Assessment. In C. H.